

くすのき



～ 夏休みが近づきました ～

連日、蒸し暑い日が続いています。東海地方では記録的な豪雨により、多くの尊い命が犠牲となっています。これからの季節、わたしたちの地域においても、いつ大雨等の自然災害が起こっても不思議ではありません。日頃から備えている必要があります。

4月当初に「気象警報発令時の登下校について」のプリントを配布させていただきました。加古川市の学校園統一の対応を記載しております。その中に「児童の登校後に警報が発令される場合」について以下のように記載しています。

- ① 発表時刻、気象情報、通学路の状況、学校内の実情等を考慮のうえ、適切な対応をします。
- ② 下校させる場合は登校班でまとめ、教職員が引率するなど安全面に十分配慮しながら下校させます。この場合、PTA本部を通して地区理事さんにも連絡しますので、可能な限り通学路の安全確保をお願いいたします。また、ミマモルメ（メール配信）でも連絡いたします。

保護者の皆様におかれましては、携帯電話を確認する回数を増やすなどしてください。場合によっては、保護者への引き渡しを実際に行うという事態に発展することもあります。ご家族で様々な事態を想定して話し合いをしておいていただければ幸いです。加古川流域に位置する本校は、職員、児童、保護者、そして地域が一丸となって大雨洪水にち、安全対策を考えておく必要があります。

さて、夏休みまで残りわずか、まとめの時期に入ります。子どもたちにとって、4月当初の自分と比べて何ができるようになり、何をもっと努力する必要があるのかを、学習と生活の両面から、自己を見つめ直すいい時期です。しっかり計画を立てて、どの子も夏休みにしかできない



～ 警報発令時の児童クラブについて ～

午前7時の時点で警報が発令されていたら学校が臨時休業になること、また、登校後の警報発令時には、その都度判断し、ミマモルメのメール配信等でお知らせすることは周知の通りです。ただ、よく学校にかかってくるのが「児童クラブはありますか？」という問い合わせの電話です。

警報発令時に児童クラブが休みの場合は「給食が学校で食べられるか」が判断基準です。

登校後に警報が発令されても給食を実施した場合、児童クラブは開設

となりますので、よろしくお願いします。

～ 子どもの歩数が減っている ～

もう十数年前のことですが、当時千葉大学におられた明石要一先生が研究されていた「子どもの歩数の減少とその影響」について引用しながら記載したいと思います。

当時の小学5年生を対象に歩数調査を行ったところ、30年間で平均2万2千歩から1万歩に減少していたとのことです。子どもの行動半径が1万歩近く狭くなっており、時間に換算するとほぼ1時間強、放課後の時間が短縮されました。子どもの活動場所が塾やお稽古になり、居場所が空き地や公園でなく自分の部屋や習い事の教室になったことが要因の一つです。

さて、子どもの行動半径が狭くなるとどのような影響が生まれるか・・・

① 食欲が低下する

外遊びが減るのでお腹が空かない。夕食時「ただいま、おなかがすいた。ごはんまだ？」という声が消えた。また、「今日の夕飯おいしい？」という問いかけに「まあね」という声しか出ない。「おいしい、まずい」というはっきりした反応が見られない。さらにおやつが消え間食が増える。おやつは「八つどき」今の午後3時に食べるからおやつ。1日に1回と決まっていた。それが間食になっていった。給食と夕食の間に食べるのを間食という。屋内での行動が増えると間食が増える。小学生で平均1日に2.5回以上間食している。これではお腹が空くわけがない。間食は夕食が終わった後にも見られるようになった。子どもの食生活の乱れが食欲の低下をまねいている。

② 体力が低下する

これについては、いうまでもなく歩数の減少と直結することである。「歩く」という動作は毎日の積み重ねであるので、時間の経過とともに体力の低下が顕著になってくる。また、最近の研究で「歩く」ことで脳が活性化することがわかってきている。そういった面にも影響が及んでいる。

③ 人間関係能力が低下する

子どもは成長する過程で3種類の大人と出会う。第1の大人は親、家庭の中での大人である。第2の大人は教師、学校社会での大人である。第3の大人は近所のおじさん、おばさん、地域社会の大人である。行動半径が狭くなると、第1、第2の大人との接触が多くなり、第3の大人との接触時間が少なくなる。親と教師は子どもを中心とした生活を作ってくれる。子どもから問いかけをしなくても大人の方から気持ちを汲んでくれることが多い。自ら意思表示しなくても生活できる。ところが、地域のおじさん、おばさんはそうはいかない。例えば、第3の大人にものを頼むときは、子どもは「言葉」で自分の気持ちを表現しなければ物事が先に進まない。そうした中で世の中を渡る術を学んでいく。人間関係能力は言葉を紡いでいくことによって身につく。

さらに十数年が経過した今、子どもの歩数がもっと減っていることが予想されます。教育現場で子どもたちを見ていて、確かに上記の3つの低下は明らかです。その中でも特に注目したいのが、③の人間関係能力の低下です。昨年度からのコロナ禍で、顔を合わせて「言葉」によるコミュニケーションをとることがさらに減少傾向にありますので、気がかりです。私たち教師が、授業や休み時間など全ての教育活動の中で、意識的に話し合う場面をつくるなど努めてまいりたいと思います。